

「兄弟姉妹たちの共同体」（ローマ14章1-13節）

1 ローマ教会の問題

「ローマの信徒への手紙」はパウロの手紙です。もっとも重要な、といってもよい手紙です。晩年に、ローマを訪ねる目的で、事前に書き送った手紙です。ローマには行ったことがないにもかかわらず、ローマの教会にじつに的確に具体的に信仰の教えを明らかにしています。

今日の聖書箇所14章では教会生活の問題が取り上げられています。この手紙の後半の主題はキリスト者の生活です。キリスト者の生活とは何よりも教会の生活ですから、それに触れずにキリスト者の生活について十分語ることはできません。教会の生活に関して、ここで取り上げられているのは、一つの共同体としての教会の交わりの問題です。交わりというと、私どもはまず人と人との交わりのことを考えます。社会的に見れば教会も一つの人間の組織ですから、それはそれで間違いないのですが、交わりという場合、聖書では何よりも神と人との交わりのことを言います。さらには神と御子キリストとの交わりも指します（ヨハネの手紙一章3節）。ですから交わりといった場合人と人との関係のことだけを考えて済むのではないのです。人と人との関わりの中でじつは神と私どもとの関わりが問題になっているのです。人と人との交わりはそれだけ真剣なものだということでもあります。人と人との関係が神と人との関係にもからんでいるがゆえにパウロはここでローマの教会の問題を（その様子を知人友人から聞いたのでしよう【5章】）信仰の問題として、教会の問題として取り上げているのです。

何が問題だったのでしょうか。ローマの教会にはパウロにここで指摘されるような問題があったようです。

信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです（13節）。

「信仰の弱い人」という言葉が出てきます。同じ意味でただ「弱い人」とも言われています。それを「受け入れなさい」というのですから、呼びかけられているのは信仰の弱くない人、つまり強い人ということになります。強い人、強い者という言い方は14章には出てきません。15章（1節）ではじめて出てきます。いずれにせよこの前後に、弱い人、強い人というのが出てくるのです。

弱い人というのは、野菜だけ食べる人です。背景には当時はやっていた思想の影響があるとされます。そうでなければユダヤ教を背景としていた一部の人だったと考えられています。野菜だけ食べる、肉を食べない、14章2節では、肉も食べないしぶどう酒も飲まないとされています。いわば禁欲的な生活をもって信仰生活と考えて

いた人たちです。特定の日を重んじる(5の節)というのも同じです。特定の日とは安息日のほかに断食の日などです。もしこれが好みの問題なら問題はないし、その人たちはそうした習慣を続ければよいのですが、彼らは、彼らから見て、この特定の日を重んじない、断食しない、肉も食べる、そういう人たちを裁いていた。自分の物差しを絶対的なものとしそれと違う人、それからはずれた人を信仰が間違っていると見ていた。そこに対立が生じ、教会の交わりがこわされていたということです。彼らはそうした生活習慣に固執し、それなしには信仰は全うできないと考えています、みな同じくしなければならぬと考えています。そうした習慣を一つの支えとして、それなしに信仰生活を送ることができないという点で、信仰からいえば弱いと言わざるをえないのです。

これに対して強い人というのは、そうしたとらわれをもたない人たちです。信仰については、禁欲的ではなく、いわば自由派です。福音によって神ならざる一切のものから解放された、すべては許されている、何のとらわれも彼は持っていません。キリスト者はキリストにだけ拘束されるものであって、それ以外のすべてのものから自由にされた。信仰の支えは何も要らない。そのように考え生活していた人たちが強い人です。問題は、お互いのあいだで「食べる人は、食べない人を軽蔑し」、「食べない人は、食べる人を裁いて」いたことです。強い人が多数を占めていた、弱い人は少数だったと思います。多数者は、いささか小心なこの少数者を「軽蔑」し、少数者は反対にそうでない人を「裁く」というようなことになっていった。それがローマの教会の問題でした。

2 主のために

こうしたことは当時の教会だけに起こることではない。具体的な問題は違っても今も起こることです。信仰は一つ、同じです。でもそれをどのようにして生活に表すかとなると違ってきます。その違いが際立ってきたとき、私どもはどのように考え、振る舞ったらよいのでしょうか。

パウロがここで洞察し、私どもに示しているのは、第一に、それぞれの生活の仕方が異なっても、それぞれ「主のために」という点で変わりはない、そこに目をとめるべきだということです。

特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです(6の節)。

私どもの今日の箇所には「主のために」というフレーズが、ことある毎に、何回も出てきます。

食べない人も、食べる人も、たとえ考え方の結果としてその行動が違っていても「主のために」一切のことを為していることは疑うことができないのです。そうではない

でしょうか。キリスト者はそのすべての可能性において主のためになす以外の可能性をもっていないからです。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬとしても、わたしたちは主のものです」。また詩編にうたわれているように「天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」(139編8節)。そのような主の前で、主のために食べない人は食べず、食べる人は食べるのです。「各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです」(5節)。あの人も「主のために」、この人も「主のために」。この「主のために」という、ここにこそ、すべての教会の人々に一致をもたらす可能性が存在していると言わなければならないのではないのでしょうか。「主のために」という祈りと思いに於いて一致が、なるほど相違はあってもそこに一致が、もつと言えば相違の中での一致が、真の一致が、主における一致がもたらされるのです。

もう一つ、私どもが、どんなに考えの違う人も、裁いたり、侮ったりすべきでない理由があります。「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つ」(10節)。「わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになる」(12節)。今の言葉で言えば神に対する説明責任が私どもにあるということです。もしこのことを私どもが真剣に受けとめるなら教会の兄弟、また姉妹との関わりも真剣なものとならざるをえないのです。

さらに三番目に、もつと積極的なことを、パウロは、自分自身を一つの手本としながら示しています。

もう互いに裁き合わないようにしよう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい(13節)。

手本というのは、これと同様な考えと態度を、パウロはコリントの信徒への手紙(8章)で示しているからです。そこでの問題は偶像に供えられた肉を食べるか食べないかの問題でした。

当時食用の肉は、神々にいったん捧げられ、そこから下ろされて市場に出回り、売られていました。一部のキリスト者は、肉を食べなかった。なぜならその肉はどの神にささげられたか分からない、偶像かも知れない、肉は汚れている、そうした不安のある肉はいつそのこと食べない、口にしない、そうした人が出てきたのです。パウロはそれに対して、そもそも、まことの神以外に神などいない、つまりささげられた神々は決してまことの神ではない、偶像ですらない、したがってそうしたことは少しも気にかける必要はない、こうしてパウロは肉を食べた。しかしもしそのことが弱い人にとつての誘惑となり、確信もたないまま、肉を食べるようになって彼自身を汚すようなことがあつてはいけないので、むしろ自分も肉を食べないという決意をはっきり書いています。パウロは自由派です。しかしこの自由を行使して兄弟を姉妹を傷つけることをしなかった。自分が満足すればいいという態度をとらなかつた。自分の自

由に対しても彼は自由であった、他の人のために自分の自由を行使しないほどに自由であった、自らの自由を愛の下に置いた。「裁き合わない」だけでなく、「つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい」、それが使徒の勧めです。

3 兄弟姉妹の共同体

教会の交わりというのはどういうものなのか、今日の聖書に刺激を受けながら少し申し上げてみました。今日の箇所を含む大きなまとまり(12-15章)のはじめのところに、こういう聖句があります。「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」(12章10節)。こうしたことが生きている教会は兄弟姉妹の共同体です。

どうして私どもが兄弟であり姉妹なのか、申し上げるまでもないでしょう。それは神を父とする一つの家族として私どもは兄弟姉妹なのです。長子はイエス・キリストです。教会は一つの家族の中の兄弟のような姉妹のような(もちろん兄弟でもカインとアベルのような時もあります、それはともかく)関係にあります。それゆえに大切なことは私どもの兄弟姉妹の関係はただ一人の主イエス・キリストの主権、その御心のもとにある、それを映し出しているということです。そうでなければそれは直ちにたんなる仲の良い人たちの集まりになってしまいます。この世の集まりと変わらなくなってしまうです。イエス・キリストではなく誰かが主となる、何かか为中心となるということになります。それでは教会にはなりません。ただひとりの主イエス・キリストのもとにある群れ、その御心を行う群れ、この主を映し出している群れ、それが教会、兄弟姉妹の共同体です。

いま私は「兄弟姉妹」と兄弟を先に出して言いましたが、姉妹兄弟という人もいます。昔私のもとで副牧師をしてくれた人が、姉妹兄弟と言っていて最初私は少し違和感をもっていたのですが、だんだんそのほうがいいのかなと思いはじめたことがあります。それを踏まえて私は兄弟姉妹の共同体と言っています。それがはっきりしていれば「兄弟たちの共同体」でもかまいません。

それよりもっと重要なことは、イエス・キリストの言葉です。母と兄弟が来ていると知らされて彼は「わたしの母と、わたしの兄弟とはだれか」と反問し、その上で周りを見回し、こう言われたのです。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」(マルコ5章34節)と。ヒトラーに抵抗し殉教した若き神学者ボンヘッファーは、聖書の兄弟という言葉の中に当時迫害されていたユダヤ人キリスト者だけでなくユダヤ人もいち早く読み込んで理解した数少ない人の一人です。兄弟と呼び姉妹と呼ぶとき私どもはそれによつてわれらの共通の主イエス・キリストを告白しています。反対にイエスを主と告白するとき、私どもは兄弟と姉妹をもっと大きな広がりの中で見ている、あるいは見るように促されているということです。

(2018年6月24日)